件名: Fw: 第 82 回新制作展鑑賞会の参加報告（小川　浩　筆）

【第８２回新制作展観賞会報告】

１　平成３０年９月２６日、午前１０時半　国立新美術館入口集合のはずが、地下鉄出口を間違え
ウロウロして２～３分遅れたところ 入口には今日参加のメンバーの姿を確認できず（相当慌てていた為か）
展覧会場に急行。
皆を探しながら２階を一回りし ３階に上ったところで添田君からの電話。
みんな揃って入口で待っているとの事。
ああ、何たる早とちり・・・。早速入口まで戻り平謝り。
スタート前のハプニング（全て筆者のなせる業）を何とか乗り越え、
予定通り五十嵐画伯の解説付きで第８２回新制作展の鑑賞スタート。

２　我々の関心は勿論１６回連続入賞の五十嵐画伯の作品。
あの大胆な構図と色遣いの蜂の絵（筆者の独断）は、今年はどうなっているのだろうか。
前述した大慌てで見て回った時には、２階と３階の一部にはそれらしき絵は見当たらなかったが・・・。
ところが、である。
画伯が指差した先には、冷蔵庫の扉があいて中にカメラと蜂の巣が入っている絵。
色遣いは地味（失礼）。　抽象ではなく具象。
これまでの画伯の入選作とは全く違った印象。
冷蔵庫に入った蜂の巣。
形がはっきりしているだけに、これをどう解釈するか。
芸術センスゼロの筆者には何とも理解しがたい物となってしまった。
これは左脳で解釈するのではなく、右脳で感じるものだと言い聞かせつつ絵をじっと見続ける。
現実の中にフット現れる非現実。
いやいや、また左脳が勝ってしまう。
センスの無さがなせる業か。つくづく感じてしまう。
絵は見た人が感じるそのままに・・・とは言われるが、何とも難しい。
参加者各々がどう感じたかはともかく、

３　画伯の案内で２階、３階の絵画を見て回り、最後は１階の彫刻。
東京スカイツリーをデザインした澄川先生の杉の一本は単純な中に
そりの滑らかな曲線が印象的だった。

４　次は、場所を移して恒例の湯島「飛鳥」での祝賀・昼食会。
ここで画伯から意外な事実が披露された。
実は今回出品作は複数あり、画伯自身が好きなのは入選作ではなかったとの事。
スマホに入れてあるお気に入り作品の写真を見せてもらうと、何とこれぞ五十嵐画伯という作品。
地中の蜂の巣に黄色い蜂。
これまで７～８年続いていたモチーフ。慣れていたせいかやはりこちらの方が見ていて安心する。
蜂を描きつつも、これからモチーフはいろいろ変えていくとの事。
来年が楽しみ。

５　画伯の絵をきっかけに、６月・１２月の例会以外にこうやって集まれるのは楽しいこと。画伯に感謝。

ついでにもう一つ厚かましいお願い。

年１回の新制作展だけでなく、春の「上野の森美術館大賞展」でも入選祝賀会ができれば、春夏秋冬と年４回集まれる。

絵のことがわからない芸術音痴の勝手なお願いなので、悪しからず。

とにかく、美術館で芸術的雰囲気を満喫した後の楽しい歓談。

有意義な半日でした。

五十嵐画伯、今年も有難うございました。（記　小川　浩）